

「置き去り」

吉武 輝子著

人は、人格に善と悪両面を内在させ生きている。だがそこに支配、抑圧、差別の状況が加わったとき、必然的に悪の面が拡大、増幅される。その究極が戦争である。そのとき個人の存在は否定され、一個の数字と化し、とくに歴史から抹消される。

この著は戦前、旧樺太、現在のサハリンに渡り、戦後、様々な事情で残留を余儀なくされた日本女性たちの歴史を丹念に追うことで、歴史の闇に葬られた事実の重みを蘇らせる。そこから浮かび上がるのは、「残留」でなく「放置」に近い対応し olmayan かない国家の冷酷である。

日本国籍をもつこと。これが引き揚げ該当者の絶対条件だった。ところがサハリンには「徴用」の名のもと強制連行されてきた人を含め、四万三千人近い朝鮮人がいた。

皇国臣民になることを強制するため、創氏改名や日本語教育により、いわば日本人以上



旧樺太残留日本人妻の「戦い」

に過酷な義務を背負わされたにも拘わらず、戦後、彼らは、政府の引き揚げ対象から外されたことになる。犠牲となったのはその朝鮮人と結婚していた日本人妻たちも同様だ。ソ連領となり混沌とした地で、生きるために結婚せざるを得なかった女性も少なくない。しかも、妻となり待っていたものは、日本への憎悪を抱えた夫からの暴力だった。国家の無惨な失策のつけを、国家から置き去りにされた者が支払われる縮図がそこにはある。

そんな中、「日本サハリン同胞交流会」の奮闘は見逃せない。故郷を同じくする者が「国がやらぬのなら自分たちで」を合言葉に、サハリンに残留日本人はいない、と言いつ張る国を動かし、一時帰国のための旅費、滞在費を勝ち取っていく。

玉音からの数日後、ソ連に撃沈された引き揚げ船の惨状も詳述されている。国際政治上、八月十五日は単なる敗戦と戦闘放棄の呼び掛けであり、正式停戦はミズーリ艦上で調印された九月二日だそう。殺戮の戦場にあつては一国の道理など通じぬ状況が、多くの犠牲者の声なき声となって胸に迫ってくる書だ。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）